（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　吉澤　誠一郎

本論文は、１９世紀後半期から２０世紀初頭にいたる、清末から民国初年の社会変動期における天津の都市形成過程を実証的に論じた中国近代都市社会史論である。そこで取り上げられたテーマは、都市防衛のための「団練」、消防組織、慈善事業、「義和団運動」、「巡警制度」、営業許可税の「捐」、遊民対策、反アメリカ・ボイコット運動、電車経営、などである。そして、これらのテーマのそれぞれを、時間・場所・人物・政策・運動・動機・言説など、多面的な切り口から極めて具体的に跡付けることによって、従来の研究史を塗り替え、錯綜する都市の混沌状況の側面を多様な政治文化のあり方として生々と描出した。

本稿の第一の特徴は、都市研究の課題を具体的に設定し、それを多角的かつ実証的に分析しているところにある。その結果、従来の近代都市論の傾向であった、伝統に対する改良や新制度の導入、欧米や日本からの影響という要素が一義的に強調されるのではなく、伝統的要素を含めて、それぞれが相互に関連し、かつ地域的な秩序や組織を持って現れるプロセスとして、同時代人の価値基準に照らして明らかにされている。

例えば、反キリスト教問題では、塩商などが進めてきた伝統的な善堂とカトリックの施設とが、類似の事業を競合して進めており、地方自治に関する日本からの制度の導入においても、伝統的な地元における公共的な活動を踏まえたものであり、またその理念においても、『周礼』などの古典から発想されていることが指摘される。これは、「伝統」の継続でもあり、「西洋の衝撃」や欧米・日本との対抗の結果とも言いうるのであり、本論文ではそのような両面の相互過程として近代性が論じられる。

第二の特徴は、都市論を天津の具体的な歴史様態において分析し、天津においてどのような特徴が見られるかという固有性を論ずることによって、近代性の内実を把握する方法を提示した点にある。そこでは、以下のような天津の歴史的位置が明らかにされる。

１都市形成過程における外国の要素の影響が少ない内陸の西安・成都や、また外国人の統治権力によって直接に形成された青島やハルビンとは異なり、天津はその中間にあって、経済的・政治的・文化的な外国人の活動が顕著ではあったが、同時にそれらに対抗しようとする地元有力者や民衆の勢力も十分に見られた。

２清朝にとり、天津は、行政的に重要な都市として位置づけられ、北京を防衛する戦略的な要衝に位置した。行政上の区画は「府」ではあったが、高官が駐在し、李鴻章の「洋務」政策や、袁世凱の「北洋新政」の拠点であった。

３天津が、義和団の戦乱を経験し、また外国軍で構成されたいわゆる８国聯軍の軍事占領を受けたことも、都市形成・都市運営上の大きな特徴を刻印した。すなわち、義和団への批判的感情が残存したことから、民衆文化の奔放な表出を抑制する政策がとられたこと、また外国に対抗しうる統治構造の確立や、国民形成への意識が高まったことである。

第三の特徴は、都市社会から移民問題を展望し、アメリカの中国移民に対する制限政策に反対する米貨ボイコット運動が、天津においても「中国人」という自己認識、「中国」への帰属意識を生み出したことを論じている。都市と 人口・移民問題が反米ナショナリズムと結びつき、その動きに天津住民が呼応するという経緯が明らかにされている。この論点は、清末における「中国」の形成過程に見られる同時代人の自己認識の特徴を取り出したものとして高く評価出来る。と同時に、華僑研究、移民研究に対しても、これまでの労働移民を中心とした研究に対して、それとは異なる、政治社会的、都市的・文化的な議論の重要性を明らかにした。

第四の特徴は、筆者が、近代性を、元来西欧の歴史像から抽出された枠組みであった、政治参加と公共性の展開、社会管理の進展、国家意識の深化と帰属意識、民衆文化と啓蒙、の４つの側面にまとめ、そこから出発しながらも、同時に、天津の近代性を分析するうえで「風俗」という同時代人の行動様式ならびに行動規範を含む社会秩序像を捉えることを、中心的主題として貫いていることである。「風俗」は、文教、暴力、祭礼、義挙、ジャーナリズム、「学堂と巡警」の各項目において論じられ、上記の４項目と相互に重ね合わせるという構造となっている。その結果、「近代性」そのものの歴史的意味が都市形成の過程に現れた「風俗」の文脈に沿って再構成され、方法的かつ概念的にも都市社会分析が深められている。

上記のように、本論文は、近代天津都市史研究におけるこれまでの研究史を一新する成果を挙げたものとして極めて高く評価されるが、今後に残された検討課題として、同郷の紐帯による広域ネットワーク、王朝国家がもつ地域統合の様態、国際的な政治・経済動向などの諸要因と地域的事情がどのように相互影響するか、などの諸点が追求される必要があろう。また、都市社会の階層構造や、基礎的共同体組織などの検討もより比較史的に行うという課題もある。しかし、これらのテーマは、全く新たな資料的・方法的準備のもとに、稿を改めて検討すべきであり、本論文において明らかにされた近代天津の都市形成過程に関する議論をいささかもそこなうものではないと考える。

本委員会は、上記のような画期的な成果をあげていることに鑑み、本論文が博士（文学）の学位に十分に相当するものであると判断する。